

富士山木造住宅協会 木こりツアーで植林 森林管理のサイクルも学ぶ

人工林の伐採現場や製材所の見学、ヒノキ材を使ったものづくりなど森林管理のサイクルを体験できる木こりツアーの最終回「植林体験」が先ごろ、富士市大淵の山林内で行わ



補植のため食害に遭ったヒノキを引き抜く子供たち(提供写真)

れ、家族連れなど約50人が森林育成と人間とのかかわりを学んだ。人工林から出る木材の流通・消費経路を確立し、持続可能な森林

経営を可能にした木材ブランド「富士山桧輝(ひのき)」の普及を進める富士山木造住宅協会・森林認証材委員会による取り組み。

参加家族の多くは昨年、富士山桧輝を産出する日本製紙北山社有林(富士宮市北山)での木材伐採の様子や、富士ひのき加工協同組

合(富士市大淵)での製材の様子を見学。今年に入り、富士山桧輝を使った学習机作りにも挑戦して、人工林が生み出す木材の生

産、流通、消費の流れを体験してきた。

この日は、こうしたサイクルの締めくくりとしてヒノキの植樹を実施。製材業のまるいチップが管理する山林内で、40〜50センチに育った苗木約300本を手分けして植えた。

場所を移動して、5年ほど前に苗木を植えた山林で補植も体験。シカやノウサギなどに幹や表皮をかじられた木を抜き取り、新しい苗木を植えて健全な成長を願った。

まるいチップの岩間誠さんは、参加者の手で植えられた苗木が40〜50年かけて建築材になることを説明。成長段階では二酸化炭素の吸収量も多く、温暖化防止など地球環境保全に貢献できるといった利点を伝えた。同委員会に加入する

「印象に残る体験を重ねて、木々と環境、人間との関係を学んでほしい。苗木が大きく育った姿を想像し、山を守るということを経験として知ってもらえれば」と話した。